赤銅色のブラネス

Monyu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
赤銅色のブラネス

【Ｎコード】
Ｎ６８０２Ｘ

【作者名】
Ｍｏｎｙｕ

【あらすじ】
犯罪者と獣人が住む”獄街”で暮らすアスナは、妹を養いながらそこで生きていくために盗賊として生きることを余儀なくされる。それから月日がたち、幸運にも妹はその身体能力の高さから騎士になり、アスナはのんびりとその日暮らしをするための日銭稼ぎ程度に盗賊稼業をこなしていた。そんなある日、所属する盗賊ギルドから変わった依頼を受け、その日を境に歴史を動かす大事に巻き込まれるお話。

プロローグ（前書き）

基本的に不定期更新の息抜き小説です。それでもよければお付き合いください。

プロローグ

砂と岩しかない荒野に風が荒れ狂ったよう吹いている。その風は薄く黄ばんだ小汚いコートの裾を弄び、大地の大部分を構成している砂を巻き上げる。その砂から体を守るようにコートの襟を握りしめ、固定する。

「あの娘が関わってなかったら、絶対に断ってたのに」

フードの中からちらりと見えるその顔には、瞳を守るようにゴーグルがつけられ、そのゴーグル越しの瞳は赤銅色だ。フードの中にしまいきれずに少しばかり出てきている赤銅色の髪は、砂交じりの風に長くさらされていたため、砂があちこちについている。

舗装された道を歩くのと異なり、砂に足をとられ一歩一歩が非常に重く、高確率で混じっている大人の握りこぶしサイズの石がその歩みをさらに遅くさせた。すでに疲労困憊で立っているのも一苦労だが、それでも足を止めずに目的地へと歩みを進める。

不意に風が止み、それに伴い俯き加減に歩いていた顔をあげる。眼前に広がる巨大な門は、ブロック状の岩を積み重ねて作った壁に取り付けられており、その高さは、２０メートルはあった。

依頼の書類に書いてあった”門の左側から、さらに左側に４つ、下から２３のブロックを押せ”という指示通りにブロックを押すと、低い轟音とともに門が開いた。

招かれるままに門をくぐりその中へと入るなり、赤銅色の瞳は驚きのあまり大きく見開かれた。

「なにこれ？」

均等に分けられた区画に、ほとんど同じつくりの直方体の建物が

ずらりと並んでおり、舗装された道路は、今まで見たことないほど平坦で何の障害もない。そして、その上を小型の乗り物が超低空飛行で走っていた。

胎動

第一話　胎動

「待ちなさいっ！！」

後方から必死に追いかけてくる茶髪の少女は、騎士団創設以来初めての女騎士で、私の妹、アスカである。獄街という地獄で私と共に幼少期を暮らしていた割には、真っすぐで正義感の強い良い娘に育っている。

私はぴたりと足を止め、追いかけている少女の方へと向き直る。先程まで勢いの良かったアスカは、同様に足を止め、警戒しながら確保の機会をうかがっている。

「あなたのような人がいるから、私たち獣人と人間が分かりあえないのよ。お願い　だから改心して、まっとうに生きて」

新緑の瞳は真っすぐにこちらを見据えている。その瞳はどこまでも純粋で言葉以上の他意がないことが伺える。そのアスカらしいセリフと表情に思わず笑みがこぼれる。その笑みを異なる解釈で捉えたアスカは、さらに語気を強めて言い募る。

「確かに人間のやっていることは、ひどいかもしれない。でも、相手に出来うる限りの好意で接すれば、いつかきっと分かってくれる。だから…」

どこまでも甘くて優しい私の妹。その言葉は、少なからず守られて生きてきた者が吐くセリフだ。誰にも守られず、ただひたすらに迫害され、それでも死に物狂いで生きてきた私たちには響かない。

音を出さずに口だけで、またね、と伝えて腰に携えていた閃光弾を放つ。アスカがきゃあっと小さな悲鳴をあげ、目をくらましているうちに窓から外へと出て行く。

「待って、お願いっ！！」

未だに視力が回復していないだろうに、アスカは必死になって腕で私を探り捉えようとしていた。その様子を横目に外に出て、目的の書斎へと向かう。その方向は、アスカやその他騎士たちが足止めされている建物とは反対方向にある。

怪盗のごとく予告状を出したわけでもないのに、盗賊（と言っても単独行動だが）の襲来を予期していた王城に違和感を覚え、目的地と逆方向に騎士たちを誘導した結果だ。

少し時間がかかり過ぎかしら？長居は無用ね。

さっさと王城からおさらばするに越したことはないが、まだ目的の物を手に入れていない。別館に到着し、3階にある宰相の書斎へと向かう。

その際に全く警護されていないことに違和感を感じなかったのは、先に反対側の本館へとその警護を誘導したせいなのだが、後にそのこと多い後悔することになる。特に何の障害もなくついた宰相の書斎で目的の物である”アンチクティ”と書かれた書類を手にとり、アスナはあることを思い出しため息をついた。

獄街で生きていくために盗賊になったアスナが所属する盗賊ギルドでのことだ。日銭が底をついてきたアスナは、何か依頼がないかと盗賊ギルドを訪ねると珍しく指名の依頼が入っていた。

最近、アスカが騎士になり盗賊稼業がやりづらくなっていたアスナにとって、その依頼はとても魅力的だった。内容は簡単なものだが、賃金はそれに以上に良いものだったからだ。数年はその稼業をしなくても済む額に即決したのだ。しかし、今考えると怪しいことこの上ない依頼だ。宰相の書斎にある資料を盗んでくる、それだけ

の内容でその額なのだからそれなりの理由があるのは当たり前だ。
現に予告状を出したわけでもないのに、その侵入が事前にばれており、資料を手にしている自分の背後には人が立っている。
「このようなところで何をしているのですか？」
背後に立っている男は赤銅色の長髪の獣人がそこに立っているにも関わらず、淡々と質問をしてくる。軽くジャンプをし、背後に立つ男の頭に手をついて飛び越え、その男の背後に立つ。後ろを向いていて顔を伺うことができないが、薄い藍の髪と細身の体型から、この男が宰相であることを理解する。歴代最年少の宰相は、その頭脳と冷徹さからよく恨みや妬みを込めて”氷の魔王”と噂されている。
「欲しいものがあったから貰いに来たのよ。これ頂くわね」
宰相の質問に答え、さっさと退出しようと戸の方へと向き直り驚く。いつの間にかもう一人この部屋にいたらしく、腕を組んだ少年が立っていた。年のころはアスカと同じ１６歳と言ったところだろうか。月の光に照らされて、その金髪がキラキラと輝いている。
「逃がしはしない。おとなしくしもらおうか」
年の割に落ち着いた口調で話す少年は、その雰囲気と威圧感から第三皇子のドルニエだろう。十数人いる皇子のなかで、次期王位継承者として一番期待されている皇子と噂されているのは聞いたことがある。
「リーガル、捕えろ」

後方に立っていた宰相が動き出す気配を感じ、振り向くとその手には新緑の翡翠がついた杖が握られていた。その口から呪文のようなものが紡ぎだされており、本格的にヤバそうな雰囲気を醸し出している。何とか距離をとろうとドルニエのいる戸の方へと後ずさる。

後方からは金属が擦れるような高い無機質な音がする。どうやら、ドルニエが帯刀していた剣を抜いたらしい。

焦る気持ちを落ち着けるために、一度目を瞑りそれから、くるりとドルニエに向き直りそのままの勢いで突進する。向かってくるアスナに臨戦態勢でむかえるドルニエの足の間へとそのまま体を滑り込ませる。そのアーチをスルリと通り抜け、そのまま廊下を走り去ろうと立ちあがった瞬間、風を切るような高い音と共に衝撃波が首元を掠る。

「っ」

鋭い痛みが首元にはしり、耳に着けていたガーネットのイヤリングが床へと落ちる。よろめきそうになる態勢を何とか立て直し、そのままの勢いで廊下を駆け抜け、窓から外へと脱出する。後ろの方で、悪態をつく声が聞こえたがそれを無視して王城から抜け出す。

何とか我が家に着いたアスナは、自分の家を見渡す。何もない殺風景な部屋には、ベットと机以外には何も存在しない。特に荒らされた様子もないし、誰かがいる様子もないようね。鍵をかけようがかけまいが、この無法地帯の獄街に女が一人で住んでいれば空き巣も入るし、変態も入る。貞操の危機何て言うのは、日常茶飯事だったりする。それでもきちんと熟睡できるのは、亡き父が残した魔道具のおかげだ。

いつものように机の上に無造作に置かれたロウに火を灯す。一見何て事のないこのロウは、その火が消えない限り来訪者を無断で侵

入することを防いでくれる魔道具の一種だ。その原理も仕組みも全く分からないが、これのおかげで夜熟睡できるのは事実だった。
疲れてご飯も食べる気にならないアスナの足はまっすぐとベットへと向かう。ボフリとベットに体を倒し、アスカのことを考える。

『あなたのような人がいるから、私たち獣人と人間が分かりあえないのよ。お願い　だから改心して、まっとうに生きて』

『確かに人間のやっていることは、ひどいかもしれない。でも、相手に出来うる限りの好意で接すれば、いつかきっと分かってくれる。だから…』

自分を捕えようとするときにアスカはいつも説得を試みた。獣人と人間が住むこの世界で、人間は獣人を忌み嫌い、迫害した。それがいつから始まったのかは知らない。ただ、私が生まれたときには既に当り前のように迫害されていた。そしてその迫害されている獣人が住む地域を”獄街”と呼ぶ。この獄街は特に整備もされず、上下水道の設備があるわけもなく、略奪と殺戮が繰り返され、疫病が蔓延している。
そんなところで１２年間だけとはいえ、アスカは暮らしていたのだ。何度も殺されそうになり、犯されそうになったにも関わらず、彼女は獣人と人間が仲良く暮らす世界を望み、そして行動した。その結果が騎士なのである。何にも汚されず、純粋で真っすぐな妹を守るためとは言え、その身を犯罪者に落としたと知ればアスカは悲しみ、そして苦しむだろう。
アスナは枕に顔を突っ込み、ぐりぐりと左右に頭を振る。こんなことを考えても仕方ない。他に生きる術を見つけられなかったのだから。そう思いなおしアスナは、獄街について考える。
獣人の住むこの地域には、獣人以外にも何かしらの大きな罪を犯した人間が住んでいる。そんな獄街を統治しているのがギルドだ。

ギルドには様々なものがあるが、基本的には上流階級の人間が後ろ暗い依頼を頼むときに何回か間を挟んで、このギルドへと依頼が舞い込んでくる。そしてその依頼をこなすことだけが、この地域に住む者を傷つけずに手に入れられる収入となっている。

まぁ、もっともギルド自体がこの獄街に法律ほどでなくとも秩序をもたらすために亡き父が創設したもので、獄街に住む者同士での殺戮や強奪を減らすためという目的も持っていた。その願いは完全に叶うことはなかったが、それでもギルドができる前よりはマシになったらしい。私が生まれたときには既に存在していたため、自分では比較のしようがない。

そこまで考えてアスナは、眠りについた。落ちて行く意識の中で、今日の成果物をギルドに届けなきゃなっと思いながら夢へと落ちた。

カーテンがない窓から朝日が差し込み、その眩しさに目が覚める。疲れのあまり布団もかけずにそのまま寝てしまったらしい。ぼりぼりっと頭をかき、大きく欠伸をして洗面所へとむかう。

盗賊稼業のついでに上流階級のお家から水道水を頂戴してきた。その水を使って顔を洗い、髪を櫛で梳く。

腰まである長い髪は基本的に結ばずそのままにしている。鏡で身だしなみをチェックしているときにふと違和感に気付く。いつもつけているはずのイヤリングが片方ない。いつ落としたのだろうと記憶をたどり、冷やりとした汗が垂れる。昨晩、王城に侵入したときに落としたのだ。

証拠品にすらならない物なので落としたこと自体はそれほど問題ではない。問題なのは、このイヤリングが魔道具でそれをつけている間は流れている猫の獣人の姿に見えていることだ。もうもふの毛皮に猫の耳に尻尾。

確かに私は獣人だが、その血はかなり薄い。ほとんど人間と変わらないのである。ただ、その身体能力と夜目が利き、異常に鼻がい

いぐらいで、それ以外は別段人間と変わりない。だからこそ、獣人の格好して盗賊をしていたのである。

静かに残っている方のイヤリングを外しポケットにしまいこむ。大きく息を吸い込んでからゆっくりと息を吐く。大丈夫、夜は暗いし逃走途中だったからはっきりとは目撃されていない。人物を特定できるほど近くで見られたわけではない。

落ち着くように自分に言い聞かせ、さっさとギルドに成果物を渡そうと決意する。出かける準備を終え、机の上で揺らめいている炎に息を吹きかけて消す。戸に手をかけ、開けたところでアスナは硬直した。その眼前にいたのは、薄い藍の髪をした宰相と茶髪の少女もとい愛する妹アスカだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6802x/

赤銅色のブラネス

2011年11月16日12時44分発行